中盛彬版・泉州の文化遺産

中盛彬の『かりそめのひとりごと』はおもしろい<その3> 橋弘文

はじめに 連続講座 中盛彬の『かりそめのひとりごと』はおもしろい

☆出口神暁校訂 1967『拾遺泉州志 全』和泉文化研究会

第1回目 2023年9月23日(土) 第2回目 2024年3月24日(日)

目的:中盛彬著『かりそめのひとりごと』を一緒に読む

+ 校訂・現代語訳付き『かりそめのひとりごと』刊行のよびかけ

中盛彬(1781-1858):熊取谷の大庄屋の降井家(中左太夫)

熊取谷の大庄屋=中家(中左近)+降井家(中左太夫)

研究者としての中盛彬:「自然科学から人文科学、芸術にいたるまで幅広い業績を残しており、単なる好事家ではなくてむしろルネサンス的万能とでもいうべき研究者であった」(小川望 2008『焼塩壺と近世の考古学』同成社)。

『かりそめのひとりごと』の内容:「熊取を中心とした泉州地域の歴史・故事・逸話」(熊取町史編さん委員会編 2000『熊取町史 本文編』熊取町)。

『かりそめのひとりごと』の記述方法:彼の住む和泉の国、山、川、村、神社、石碑、そこに住む人々の事を彼は文字通り親切に見ている。それがやがては子孫の住む土地であり、そこにまつわるすべての伝説、昔話はやがて子孫のものが聞くであろうものである。彼はそうした意図の下に之等を正確に集め写し、当時に於て出来るかぎり古書を正している。その時代において正せるかぎり正して置くことがとりもなおさずその時代に生きる者の歴史的使命であり、歴史的創造である(酒井忠雄 1952『中盛彬と「かりそめのひとりごと」』和泉郷土図書館)。

今回のテーマ 中盛彬版・泉州の文化遺産

中盛彬が人々にすすめる泉州のモノ:「この地に遊ばん人は必ず見るべし」

中盛彬の選考基準:歴史の古さ+不思議な出来事

「奇古」=風変わりて古めかしい(白川静 1996『字通』平凡社)

1 安松村と榎井村のあいだの地蔵

『かりそめのひとりごと』：安松村・榎井村の間、八丁縄手に石の地ざう菩薩立たまふ。面容いと奇古にして、大に今のものとかはれり。うしろに承平八年(938)二月十八日と彫付たり。過し享保十一年(1726)、紀州よりこの戦場の地勢をとほせ給へりし時に、しるして奉れる絵図の小言にもこの地蔵のことを書たりしよしは、村の記にみゆ。承平八年は天慶元年戊戌にて、平将門が乱のはじめなり。ことしまで八百八十三年に及ひぬ。この地にあそばんひとはかならずみるべし(出口神暁校訂 1967:124)。

(1)地蔵の設置場所と地蔵の背面に彫られている建立年

	中盛彬『かりそめのひとりごと』	木崎愛吉 1914『撰河泉金石文』	出口神暁校訂 1967『拾遺泉州志 全』
設置場所	安松村・榎井村の間、八丁縄手	安松村の西はずれの民家の地内	
建立年	承平八年(938)二月十八日	正平十八年(1363)二月十八日□□	正平十八年(1363)□卯二月十八日□□

(2)地蔵の姿

「面容いと奇古にして、大に今のものとかはれり

→「この地にあそばんひとはかならずみるべし」

(3)『かりそめのひとりごと』以後の地蔵

この正平の石像、もと八丁地蔵とて、村外れの暇に在り、遠近の参詣者多かりしが、嘉永三年(1850)の頃、大阪なる地蔵講中のなにかし講金を懐中して参詣の途すがら、追剥に罹らんとせしを、この地蔵堂に身を隠して、其難を免かれしより、時人の信仰一層厚くなり、今も大阪若榮講寄進の石燈一対を存せり(木崎愛吉 1914:205)。

(4)「この戦場」 1615年4月榎井合戦(大阪夏の陣)の榎井川

徳川方	大坂方
浅野長晟(紀州和歌山城主) 上田宗古・亀田高綱	大野治房・大野道犬 塙(ばん)団右衛門・淡輪六郎兵衛

(田尻町史編纂委員会編 2006『田尻町史 歴史編』田尻町)

(5)榎井合戦の後日談

『かりそめのひとりごと』：この討死のうちには、淡輪六郎兵衛・塙団右衛門二人の塚は榎井村北の出口と、むらなかとにあり。団右衛門がのは、いしめもあらきに、野辺にて風霜にさらさるることも、はなはだしればにや文字みえず。六郎兵衛のは、おほよそよみえらる。ともにしるしつけて好古

の感をたすく。この塔のまへに石灯臺あり。年号などはしるさず、塙団右衛門とえりぬ。たかさ四尺あまり、塔よりはあたらしくみゆ。すぎし文化十一年(1814)夏四月、この団右衛門門岑鉄牛居士が、二百回諱にあたりとて、芸州より来りて木塔を造立し僧をつどひて供養せし施主は、この人を討とりし八木氏の子孫にて今も新左衛門とぞいふ(出口神暁校訂 1967:51-53)。

▶ 1814 夏 4 月、塙団右衛門を討ち取った八木氏の子孫が、塙団右衛門の 200 回忌に塙団右衛門の墓を訪れ、木塔を造立し、僧を集めて供養した。

(6) 榎井合戦と農民

『かりそめのひとりごと』:このときの乱を避て、農民のがれかくれし、谷は、一里あまり東南にて、今も小屋の谷とて、たきぎとりにゆくところなり(出口神暁校訂 1967:54)。

▶ 小屋の谷:榎井合戦のときに、付近の農民が戦禍を避けて隠れた谷

盛彬の時代の小屋の谷:たきぎとりにゆくところ(共同使用地)

(7) 榎井合戦の物語化

…→寛文年間(1661-73)以前に成立『難波戦記』『泉州榎井合戦事』

塙団右衛門を主人公とする小説…司馬遼太郎 2016[1974]『言い触らし団右衛門』(中公文庫)中央公論新社

2 まれくす堂の石像

『かりそめのひとりごと』:隈取谷和田村、むかしは箕の和田の里といへり。寛永十八年(1641)岡部家御入城あらせ給ひし後は、みのちふ語路の、さしつかへぬれば、和田とのみいふ。此村の西、小川にそひて一小堂あり。行基瓦をもちてふきぬ。いとふるくみゆ、土人呼んで、まりくす堂・まれくす堂・また、まらくす堂ともいへり。慶長(1596-1615)の記には、まりこそ堂とあり。稀なる樟(くす)一幹をもて、六間四面の堂を建しかば、稀樟(まれくす)丸樟(まるくす)ちふ義なりなどいふ。近頃大永(1521-1528)の年貢帳をみれば、その時代この村に、まれくすちふ豪農ありて、村高六七分はこの者もちたり。こをみてぞ、さてはこの堂は、このまれくすの一建立なりしゆえに、まれくす堂とは、云ひならはせしなるべしと知ぬ。今のごとく小堂となりしも、又いつのほどにや、内に安置せし石像もいと奇古なり(出口神暁校訂 1967:116)。

(1) まれくす堂の場所

「熊取谷和田村の西、小川沿いにある」

五門より和田に通じる五門和田線の和田の入口附近に一間四面の小堂があり…

(泉州郷土史研究会編 1976:29-30)

「箕の和田」…寛永18年(1641)岡部美濃守宣勝入城→「和田」

(2)まれくす堂の呼称

まりくす堂・まらくす堂・まりこそ堂

(3)堂の名称の由来

①稀なる樟の一木で建立された→稀樟(まれくす)・丸樟(まるくす)

②豪農のまれくすによって建立された[大永(1521-1528)の年貢帳に豪農のまれくす]

(4)まれくす堂内の石像:「石像もいと奇古なり」

3 半田(はた)村道教寺の梵鐘

『かりそめのひとりごと』:半田村、もとの名は秦村なり。秦の河勝が末、雄依(をより)ちふ人の居地なりしゆへの名なりと、いひ伝ふれど証書はなし。今の道教寺はそれが裔なりとて、秦氏なれど、是も証拠正しからず。此村の東なる畑村と、秦村と読みの似かよへれば、聞まがふこともぞあるとて、近き世に半田(はた)とかき改ぬ。されど秦を、半田と仮名にかへしまでのことなり。今もふるき物には秦村とするしたり。この道教寺の住僧教祐は、東本願寺二世宣如の寵弟なりしが、吾坊に鳴鐘を、かけたきよしをいひければ、さらばとて給りぬ。天和二戌とし(1682)四月とりうつして、ここにつれり。此かねもとは、河内国沼河郡勝軍寺の鐘にして、かたちも今鑄るものとはかはりて、いと奇古なり。めぐりに金光明經の品名をひしと彫つけぬ。その措法(かいほう)愛すべし、正暦三辰年(992)十二月とあり。元弘の頃(1331-34)、楠氏正成朝敵追討のはじめ、勝軍寺に勢ぞろへして、吉兆の寺号なればとて、この鐘を乞得つつ数の戦場を持たはり、険岨を転輸せしむとなむ。さるゆへんにや、疵おほくつきたれど、今も文字はよみえらる。後にいかなるところにありて、いかにして東本願寺におさめしにや、堺の坊にありしをたまはりしなり。こを譲うけしとき、又そのことをかたはらの空区にえりしるしぬ。黄鐘調なりといへれど、正音にはあらず。いづれにしても古きものなり。泉州にては第一のかねなるべし。正暦三壬辰(992)よりことしまで、八百二十八年になりぬ。この地にあそばんひとはかならずみるべし

(出口神曉校訂1967:117)。

(1)半田(はた)村と道教寺

①秦河勝(はたのかわかつ)の子孫の秦雄依(はたのおより)の居住地

→秦(はた)村→半田(はた)村

②道教寺…秦雄依の子孫?

[道教寺の縁起]:本願寺覚如上人が紀州玉津島明神参詣の途中この地において、浄土真宗の本義を説き、これに感激した秦右兵部が直ちに剃髪し仏門に帰依して道宣と称し、道教寺を開いたという。川勝山と号す(臨時貝塚市史編纂部編 1957『貝塚市史第二巻 各説』貝塚市役所)。

(2)道教寺の鐘の来歴

河内国沼河郡勝軍寺の鐘(992年12月)→楠正成が戦場に持ってまわる…→東本願寺(堺の坊)→1682年4月に、東本願寺二世宣如が道教寺の教祐に与える

(3)道教寺の鐘

「いと奇古なり」「泉州にては第一のかねなるべし」

→「この地にあそばんひとはかならずみるべし」

(4)後年の研究による道教寺の鐘の鑄造年と鑄物師

鐘に刻まれた鑄造年号…判読できない

鐘に刻まれた鑄物師…「山川助永」:文永(1264-75)・弘安(1278-88)の頃に活躍

(木崎愛吉 1914『摂河泉金石文』郷土史研究会、坪井良平 2023『日本古鐘銘集成(新装版)』吉川弘文館)

4 信濃堂

『かりそめのひとりごと』の信濃堂(出口神暁校訂 1967:233-235)の概略:

信田明神のつかはし女である若の御前(若のまへ)に仕える狐が女性に化けて、伯太の谷川で溺れるふりをする。信濃国から来た西国三十三所巡礼の3人連れが、この女性を救い、信濃に連れて帰る。その3人のうちの1人、高梨という武士が、くだんの女性と結婚し、3人の男子をもうける。結婚9年目、3歳の子が、寝ている母に尾があると人に言う。母は「恋しくばたづねてもこよ和泉なる/信田の森のうらみ葛のは」と障子に書きつけて家を出る。3人兄弟のうち兄2人は高梨を名乗り、弟は信田を名乗る。2人の兄は信玄との戦争で死ぬ。信田が泉州を訪れる。吉郎太夫という農夫の母が、16、7年前の出来事を信田に語る。「夢に狐が現れて、こう話した。私は若のまへの眷属です。信濃に行き、男子3人を産みましたが、恥ずかしいことがあり、逃げ帰ってきました。今夜、元の穴で自害しようと思いますが、そこで自害すると若のまへの名を汚すことになりますので、この屋の園をかしてください。翌朝、子の吉郎太夫に聞くと、吉郎太夫も同じ夢を見ていた。不

思議なこともあると思い、いっしょに園へ出てみると、古狐が舌を食い切って死んでいた。哀れに思ってその骸を埋めた。」信田は、狐が埋められた場所に小堂を建て、田地を買い、僧1人を住まわせて母狐の菩提を弔った。この堂を信濃堂といった。その後、戦乱のために信濃堂は破壊され、その田地も廃れてしまった。寛永年間(1622-44)牛滝山の穀屋坊訴訟で、穀屋坊の僧が江戸に行った。そのおり、松平豆州侯の家士、信田九郎左衛門尉に、たまたま信濃堂の事を話した。すると信田九郎左衛門尉は、それは私の祖先の事だと言い、くわしく聞き出した。そして穀屋坊が帰国の時に使者をつけて行かせ、信濃堂の跡地に小堂を建て後世を弔った。この堂を今も信濃堂という。このときの文書が穀屋坊に残っている。

(1)二つの信濃堂

	前信濃堂	信濃堂
場所	吉郎太夫とその母が、狐を埋葬した場所	前信濃堂の跡地
建立時期	1570年ごろ?	寛永年間(1622-44)
建立者	信田氏(父=高梨氏/母=狐)	松平豆州侯(松平信綱)の家士、 信田九郎左衛門尉
関係者	吉郎太夫とその母	牛滝山の穀屋坊

(2)信濃堂の場所

『かりそめのひとりごと』:(吉郎太夫とその母が、狐を埋葬した場所)

「泉邦四縣石高 寺社旧跡 并地侍傳」1698 [讃岐家文書](和泉市史編纂委員会編 1968
『和泉市史 第二巻』和泉市):土生村宮の前

(3)土生村の信濃堂

①『延喜式神名帳』[江戸時代中期頃に編述]:

信濃堂 今天神境内ニ有之

昔ノ堂ハ絶テ、寛永年中牛滝再興ノ訴訟ニ穀屋坊江戸へ下ル、御老中松平伊豆守殿内篠田九郎

左衛門ト申仁、信田狐ノ子孫ノ由物語アル、此時穀屋坊ト同道ニテ使者ヲ登サレ、此地ニ狐ノ菩提ヲトムライ申シケル、其節再興ノ信濃堂也

(高石市史編纂会編 1984『高石市史 第3巻 史料編Ⅱ』高石市)

②「一橋領知大鳥組寺社改帳」[天保14年(1843)正月]

泉州大鳥郡綾井村之内 土生村

天神社 神主氏子廻り持

社平地 除地境内千八百四拾六坪

拝殿 壺ヶ所 是者正徳四未年七月、願之上、新建之分

石鳥居 壺ヶ所

信濃堂 堂守無住 是者堂守之儀、享保八卯年七月廿一日願之上、入堂仕候処、

其後無住ニ相成申候、堂之儀者当時破壊在之候

右天神社勧請時代不知、村中氏神ニ而、古来^方在来リニ無紛分ニ而、先前^方書載候分

(高石市史編纂会編 1984『高石市史 第3巻 史料編Ⅱ』高石市)

(4)信濃堂建立をめぐる不思議な出来事

①異類婚姻 ②夢によるコミュのケーション ③穀屋坊と信田九郎左衛門の出会い

→「このほとりに遊ばむ人は必ず見るべし」

(5)信濃堂の現在

「信濃堂は今はないが、そこにもとあったという石柱が、いま土生町西光寺に残っている。」

(和泉市史編纂委員会編 1980(復刻)[1965]『和泉市史 第一巻』和泉市)

5 蕎原村栃の木谷の栃の木

『かりそめのひとりごと』:蕎原村栃の木谷のとちの木は、廻り七ひろ余ありて、この州今の世の大木なり。いつの頃にか神霊ありとて、栃明神といひならはしたり。昔より高野先達の修行祈禱するところなり。近き頃、藩士勸農のために巡村ありし序に、名だたる木なればみまほしとて、この村長にはかり給ふ。村おさそのころをえしが、むばら生茂りて、道いとおぼつかなければ、石を除き土

を穿て、栃の木のひとつりまで路つくりせり。さてあすこそといふに、その夜雨風つねならぬに雷さへけしからず鳴りて、地震ひ石をころばかし、木を吹倒しければ、きのふつくりし路はいづくにやありけむ、おほかた見へずなりぬ。こは神木の辺りを道つくりせしゆへに、神のいからせ給ふにこそ、怖々とてきたやみぬといへり。このことをかつて父にきき及たれば、いとみたくおもひ過し、亥の夏おもひ立て、興蔵寺・芳元寺などつねの話敵をともし、づさに割籠などもたせていてたちぬ。さまで遠き路にしもあらねど、水間寺より東は石壁上に聳へ、片崖下にかかれり、あるはくだり、あるはのぼり、葛を拳ぢかつらにすがり、からふじて未の下刻にのぼりつきみれば、ききしよりもいと大なる木なり。めぐりおほよそ五丈三四尺あり、ことに幽邃にして、深樹蒼鬱たれば、里人のおそれあへるもさることなり。げにいくばくの歳をや歴けむ、この地にあそばむ人はかならず見るべし、裔孫一株とりかへりし、今書院の庭にあるものはこれなり(出口神暁校訂 1967:161-2)。

(1) 蕎原村栃の木谷の栃の大木=栃明神/高野先達が修行祈禱する場所

(2) 盛彬が父から聞いた話

岸和田藩の藩士が農業をすすめるための役目で蕎原村に来ることになった。その役目の藩士は有名な栃の大木を見たいと言ってきた。蕎原村の村長は栃の大木に至る道を苦勞して作った。ところが藩士が来る前日に雷をともしう嵐が起り、その道は見えなくなってしまった。この神木に至る道を作ったことを神が怒ったにちがいないと恐れ、藩士の大木見学はとりやめになったという。

(3) 盛彬が友人たちと栃の大木を見に行く

道のない山を登りくだりして午後3時ごろに到達する。木の周りは約17m(五丈三四尺)、幽邃(ゆうすい)にして、深樹蒼鬱(おううつ)。盛彬は、この栃の大木の株を持ち帰る。

「幽邃(ゆうすい)にして、深樹蒼鬱(おううつ)」+「げにいくばくの歳をや歴けむ」

→「この地にあそばむ人はかならず見るべし」

(4) 蕎原村の栃の大木=栃明神のその後

なおこの話を伝えるとちの木は、十数年前まで健在であったが、その後台風により倒れてしまった。

(臨時貝塚市史編纂部編 1957『貝塚市史第二巻 各説』貝塚市役所)

6 成合寺の蓮の花

『かりそめのひとりごと』：成合寺の開基愚白和尚は桃水禅師としたしかりき。桃水はいつも愚白の身行を誉む。愚白は常に桃水の徳を誉られき。ある時村民を成合寺に集へて能登の総持寺に出火ありこの庭石に水をかけよとて頻りにそそがせけるに、しうしうとしみこみけり。数月の後能登より使僧きたりて出火の時は火消人足を賜り抜群の働きかたじけなきよしを謝しぬ。遷化の時満山に蓮花咲出たり。水にだにもその種子なからむにはおふることあるまじきものの山に咲しこといとあやし。その花をとりて今に院に貯たり。もとより普通のものにあらずこの院に遊ばむひとは必ずみるべし。かかる類のこと猶多かり（出口神暁校訂 1967:215-6）。

(1)成合寺

戦国乱世の後寺運衰え僅かに観音堂一字が残るのみであったが、元禄年間（1688-1704）に佐野の豪商食野家によって愚白和尚を中興開山として再建された（泉州郷土史研究会編 1976:29-30）。

(2)愚白和尚

雲山愚白=曹洞宗、1619-1702。肥後（熊本県）の人。十七歳で律宗に出家したが、十九歳、肥後宗岳寺の斧山に見えて曹洞宗に転じた。臨済宗の愚堂・大愚・雲居などに参じ、後、曹洞宗の月舟宗胡に参じて宗旨を得た。また、木庵にも参じている。肥後の大悲寺に住し、晩年、和泉に成合寺を開創した（面山瑞方原著・能仁是道訳編 2001『乞食桃水逸話選』禅文化研究所）。

(3)愚白和尚をめぐる不思議な出来事

①ある時、愚白和尚が村民を寺に集め、「能登の総持寺が火事です。この石に水をかけてください」と言って、庭の石に水をかけさせた。数ヶ月後、能登から僧が来て、火消しのお礼を言った。

②愚白和尚が亡くなったとき、蓮の花が咲いた。

(4)成合寺の蓮の花 「もとより普通のものにあらず」→「この院に遊ばむひとは必ずみるべし」

おわりに

(1)「文化遺産」と人間

安松村と榎井村のあいだの地蔵：石造物 まれくす堂の石像：石造物

道教寺の鐘：鋳造物 信濃堂：建築物

蕎原村栃の木谷の栃の木：自然の樹木 成合寺の蓮の花：自然の花

◎ □ 盛彬の視点：物や自然との人間（過去の人間[死者]）のかかわり

→「この地に遊ばん人は必ず見るべし」

世界文化遺産の理念との共通点…例：2015年提出の推薦書「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」（建築物を重視）→イコモス（International Council on Monuments and Sites）の提言「建築物中心の推薦書の見直し」+「禁教期の信仰や生活に焦点を」→2018年「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」登録

(2)『かりそめのひとりごと』と未来

①子孫に対する心得

i 弱い者を助ける心 ii 悪い道に入るな iii 家風を変えるな

iv 適切な義理と決断のタイミング v 付け焼き刃ではない知識を身につけ、家産を守ること

②『かりそめのひとりごと』の現代性

口頭伝承を尊重して泉州の伝説や出来事を記録して、子孫に伝える＝祖先を含む泉州の死者の声に耳を傾けることを通して、未来の他者に語りかける

大澤真幸 2024『我々の死者と未来の他者』集英社

「すでに亡くなっていった者たち、すでにいない他者たち、しかしかつては確実に存在し、現在の<我々>はその人たちの為したことのおかげで存在しているのだと感じることができる他者たち、そのような他者たちからの恩を忘れ、彼らへの思いを一切もたない人が、そうした死者よりもなおいっそう徹底的に不在であるような<未来の他者>のことを思うことができるだろうか。<過去の他者>の願望に応じようとする構えのない人が、<未来の他者>に応えることができるだろうか。」

[参考文献]

出口神暁校訂 1967『拾遺泉州志 全』和泉文化研究会

堀口康生校訂 1967『和泉名所図会』柳原書店

面山瑞方原著・能仁是道訳編 2001『乞食桃水逸話選』禅文化研究所

井上正雄 1976[1922]『大阪府全志』巻之五 清文堂

泉州郷土史研究会編 1976『熊取町の歴史(1)』熊取町教育委員会

熊取町史編さん委員会編 2000『熊取町史 本文編』熊取町

柴田実編 1958『泉佐野市史』泉佐野市

和泉市史編纂委員会編 1980(復刻)[1965]『和泉市史 第一巻』和泉市

和泉市史編纂委員会編 1968『和泉市史 第二巻』和泉市

臨時貝塚市史編纂部編 1957『貝塚市史第二巻 各説』貝塚市役所

田尻町史編纂委員会編 2006『田尻町史 歴史編』田尻町

高石市史編纂会編 1989『高石市史 第1巻 本文編』高石市

高石市史編纂会編 1984『高石市史 第3巻 史料編Ⅱ』高石市

木崎愛吉 1914『摂河泉金石文』郷土史研究会

桑原恵 2004『幕末国学の諸相』大阪大学出版会

中塚喬清 1987『信太郷土史』

小川望 2008『焼塩壺と近世の考古学』同成社

大澤真幸 2024『我々の死者と未来の他者』集英社

酒井忠雄 1952『中盛彬と「かりそめのひとりごと」』和泉郷土図書館

司馬遼太郎 2016[1974]『言い触らし団右衛門』(中公文庫)中央公論新社

坪井良平 2023『日本古鐘銘集成(新装版)』吉川弘文館